

II 記念講演

『未来へ手渡すもの』

放送タレント 永 六 輔



一昨日の夜遅く秋篠宮家に赤ちゃんが生まれまして、きのう、きょうと、僕はとてもテレビを楽しみに見ておりました。でも、言葉づかいがどうにもならないんですね、若いアナウンサーやレポーターが。「両陛下が孫に会いに」とか、「お孫さまに会いに」という局もありましたし、「お初孫とか、お初孫とか、どっちだかわからない」といい、「また女の子でした」と「また」といった人もありますし、ああいうのもぜひライブラリーでとっておいていただいて、いかに敬語が乱れていくかということ記録していただきたいな、と思いながらテレビを見ておりました。

ここに伺ってから「しまった」と思ったのですが、こんな素敵な、大事な節目の会に記念講演というおこがましき。横浜生まれの遠藤君という人がいるんですね、遠藤泰子というアナウンサーが。その遠藤君から「横浜で放送関連の会があるから、ちょっと出てください」といわれたので、ただそれだけのことで来てしまいましたら、大変な会で、なんとって前座に大臣がいたり、市長がいたりしますので、「しまった」と思ったわけでした……。

遠藤泰子との『誰かとどこかで』というラジオ番組がまもなく7,000回、25年に入っております。何の記録も残っておりません。記録のことになりますと、僕よりもっと古いのが秋山ちえ子さんで、秋山さんはまもなく9,000回という、これは個人の名前で1人でやっている番組では大変な長さを誇っているのですが、これも記録が残っていません。僕のすぐあとに小沢昭一が迫ってきているのですが、夕方やっている番組、あれも記録に残っていないという話をずっとしていながら、こちらのライブラリーがテレビでスタートして、放送ライブラリーというからには、いずれラジオ番組も入るということで、ラジオの人間としては非常にうれしいし、テレビだけではないのだという部分がホッとしたしだいです。

そういうわけで、こちらのきょうのプログラムのなかで、例えばNHKの川口さんがおっしゃっているように、放送が使い捨て文化の代表のように思われている一面を持っていることは、まさにそのとおりでありますし、また民放連の佐々木さんが、放送に携わる人たちが日々情熱を傾けて制作してきた番組は文化遺産だ、とおっしゃっている。そのとおりなのでありますが、日々情熱を傾けないで作っている番組もぜひ加えていただきたい、と思ったりしています。

横浜の市長さんは、こういう画期的なライブラリーができることになって横浜を選んでくださった、選ばれたことにたいへん感謝している、というお話ですが、たまたま私はいま、秩父で『ミカド』を公演しようという運動をやっております。それはどういうことかと申しますと、

明治17年に秩父事件が起こります。この秩父事件は、絹を作っていた秩父の農民たちと行政当局や軍隊との間で起きた事件なんですけれども、それが当時の横浜、秩父から絹が運ばれてくる横浜経由でロンドンでオペラになって上演されます。なんと、明治18年6月のことで、これが『ティティプの町』というサブタイトルのついた、あのオペラ『ミカド』なんですね。そのオペラが、あの時代にですよ、なんの連絡手段も、無線もなければ何にもないという時代に、どうしてそんなに早く横浜経由でロンドンで上演されたのか。もっとすごいことは、今度は明治18年の暮れには横浜のゲーテ座でそれが再上演されているんです。つまり、いったいそれは何だったのだろうか。いまのように宇宙衛星を上げて一瞬にして地球の裏側が、という時代とわけが違います。そのわけが違うときに横浜が果たしていた機能、ましてやゲーテ座という部分がいま僕にとってはいちばん興味のあるところとして、あの時代にあれだけの情報網が完備していた、ここから発信されていった、それを受け止めた、ということで考えますと、あのゲーテ座なんですね。もちろん、いまのゲーテ座とは場所が違いますけれども、そこに来ている人たちが築地小劇場を作る若者たちなんです。ですから、いろいろな意味で、情報ということですとか、それからドキュメントも含めますけれども、いろいろなテレビの作品を集めてライブラリーを作るには、ここはとってもふさわしいところ、というよりは横浜が一番。これは神戸でもこういうケースはないんですね。長崎にもありません。やはり横浜をベースにして、明治以降どういうふうに情報がヨーロッパに流れ、ヨーロッパからの情報をどういうふうに横浜が受け止めていたかを考えますと、明治17年、18年のレベルでできたことが、いまでもそんなことはありえないと思うのです。こちらでいま事件が起きて、翌年ロンドンでミュージカルになって上演されて、その年のうちに横浜で再上演されるということはまずありえないと思うのです。でも、明治17年、18年でそれができてしまっているのはいったい何だったのだろうか。

しかも、『ミカド』の序曲のなかには何度も何度も繰り返して官軍マーチが出てきます。つまり、♪チーラカッタッタというのが、『マダム・バタフライ』の場合は、ちゃんとプッチーニに教えた方がいて、誰がどういうふうに教えたかということは記録に残っておりますが、明治17年の段階で、明治維新のときの官軍マーチをどうやってギルバートとサリバンは作品のなかに入れたのか。もう一つ、プッチーニの『蝶々さん』は日本を取り上げたオペラの代表として海外で上演されているようにお思いでしょうが、『ミカド』のほうが10倍近くも公演回数が多いんです。ですから、外国の映画に出てくる日本というと、『ミカド』がベースなんですね。秩父の町がベースなんです。これは決してよい形では出てきません。そこで、僕たちはもう一回ティティプ、秩父ですね、その秩父で何が起きたのか。それがどういう情報で伝わっていったのか。しかも、秩父の皆さんは『ミカド』をご覧になっていないということなので、村おこしといいますか、市民運動といいますか、なんとか秩父で、ゲーテ座でやったようにやってみよう運動をしているわけで、そんなことから、横浜が当然という気がいたします。

さて、基調講演ではなくて記念講演ですので、少し気楽にやらせていただこうと思います。何をどのように残すかということなんですね。これは最近の話題から逆算していかうと思うのですけれども、例えば2、3日前に週刊誌などにも『たけしを追い越した日光サル軍団』とい

う見出しがありました。あの日光サル軍団というのがとにかく人気があって、いろいろな形でわれわれは見る事ができるのですけれども、その日光サル軍団ができるためにはサルが人気を集めなければいけない。そのサルが人気を集めたのは、周防猿回しの会と猿舞座という二つの団体がありまして、その周防猿回しの会の次郎が反省したり、いろいろCMで活躍して、お客さまを集められるものですから、日光サル軍団が「よしサルでいこう」と別の形で団体を作って、今度は1匹の猿回しでなくて、10匹というんですか、でやって、いま話題を集めていますね。ところが、そのもとになる猿舞座から分かれた周防猿回しの会という、山口県光市でまさに滅びようとしている猿回しの芸をなんとか残そうと頑張ったのは小沢昭一さんなのです。

小沢昭一さんが個人的に残している放浪芸の貴重なビデオは大変なものです。そういうものは番組にはなっていません。なっていないけれども、そういうふうに個人で持っているライブラリーがある。また、例えば色川武大さんが持っているビデオがどれだけ優れたライブラリーか、あるいはラジオでいいますと、三木鶏郎さんのライブラリーには、ほとんどというくらいいいものが取ってあるんですね、鶏郎さんは『日曜娯楽版』以来ですから。しかも、鶏郎さんはテレビの時代になってからみごとに引退していますから、ラジオの分野がそこではとても保存されているんです。そういう個別の保存も確かにいいのですけれども、それでは限度がありますから、横浜に今度のように放送ライブラリーができるのはとても素晴らしいことなんです。もう1回申しますと、日光サル軍団が話題になっているときに、いったい、その前に周防猿回しの会というのがどうして生まれてきたのか。そのもっと前、これは被差別部落の芸能ですから、小沢昭一さんたち、僕らもいっしょに歩きましたけれども、滅びそうになってしまった猿回し、かつて猿回しだったことをいうのもいやがる人たちに、もう1回やってくださいと頭を下げて、どうやって猿回しを復活したのか、その歴史までは全然出てこないまま日光サル軍団がいきなり出てくるんですね。つまり、こういうところがわれわれにほしいライブラリーなんです。なぜ日光サル軍団がビートたけしを追い越す聴視率を得られたか、ということの前に何があったのか、どんな苦労があったのか、というのが全然出てきません。

ついこの間、雷門助六さんが亡くなりました。亡くなって、雷門助六さんを見たこともないような連中がワイドショーに並んで、惜しい方を亡くしたとか、『三番叟』でもいいんですけども、あの方の『操り三番叟』がどんなにすごかったかという話をする。当人は見ていないのにしゃべっているのがよくわかるんです。寄席にも行ったことのないやつらが偉そうに惜しむんですね。そのときに『操り三番叟』がないんです。つまり、あの名人芸が残っていないんです。だから、どの局でも出てこない。ああ、ライブラリーがあれば、というふうになりますよね。もちろん放送ライブラリーでは、そういう穴になっているところをこれから残していただけたらと思いますが、黙っていても、例えば金丸さんがどういうふうに力を発揮して、竹下派がどうしてこうしてというのはいくらでもありますね。こういう歴史、ドキュメント、ニュースのたぐいのものは比較的残しやすいですね。でも一方で、いま申しましたように、日光サル軍団が登場する前、その前に小沢さんが何をしたのかということからのライブラリーがきちんとないと、日光サル軍団とは何だかよくわからなくなってきます。もちろん、雷門助六さん

がたいへん貴重な芸をお持ちだった。そのお持ちだった芸でも、ビデオに間に合っているのに残されていない。

間に合っていないというケースはよくあるんです。明治29年にレコードが初めて出てきますね。レコードに間に合った人はレコードに、それが蠟管であっても、残っているわけです。でも、例えば三遊亭円朝はレコードが実用化される2年前に亡くなっているんです。そうすると、円朝は残っていないわけです。同じように、画面で動いて残っている人たちは何人いるかというデータも、とても貴重なデータで、間に合わなかった方はいたしかたありません。

先ほどちょっと出てきました『日曜娯楽版』も、当時はテープがありませんし、生放送ですから、間に合っていないんですね。自分のことになりませんが、『夢であいましょう』という番組をかつてやっておりましたが、これも残っておりません。残っていたのは、プロデューサーが自腹をきって、個人的にスタジオで別に撮っておいたキネコだけなんです。つまり、オンエアされた番組としては残ってないんです。テープとかビデオとかは、とくにここ数年であつという間に安くもなりましたし、ダビング一つでも簡単になってきましたね。一つ見ながら裏番組を録画したり、みたいなことは普通の家でもできるようになりましたから、この技術の進歩は、そこに間に合わなかった芸能に対してどれだけのことができるかとなりますと、色川武大さんが持っているテープを全部チェックしていただきたい。「あ、これがあつた」というのが必ず出てきますから。小沢昭一さんが日本中を走り回り、世界の放浪芸もまとめている。これもビクターが相当に頑張っていますけれども、それがビクターでなくて、そのもっと前、編集されるもっと前のビデオは小沢さんのところにあるんですね。つまり、そういうものをどうやって組み込んでいくかによって、この放送ライブラリーが、ただ番組を残して、見たい番組があればそこで見られますよ、というのではないライブラリーになっていくし、ぜひそうしていただきたいと思うのです。

鶏郎さんとか色川さんとかお名前を上げましたけれども、もう1人、葦原英了さんが持っている資料も素晴らしいものです。それもぜひ、ライブラリーのほうで考えていただきたい。逆にいいますと、ライブラリーは便利だな、ということで、これは図書館もそうですけれども、見にいらして、ああ懐かしいな、というライブラリーではなくて、この前、あるいは筋道、もとは、あの人の何は、ということ、横浜市民の皆さんがいちばんいっしょりやすいんですから、ぜひどんどんライブラリーに注文を出して、僕らも、あそこにこういうものがあるということをご協力しますので、少しでも充実したライブラリーにしてほしい。そして放送という以上は、いつの日かラジオ番組も入れてほしい。それには、いま調査している最中だそうですが、ラジオの番組がいったいどれだけ残っているかということもあるんですね。『日曜娯楽版』は、完全な形では一つも残っていません。先ほどお話ししたように、唯一、鶏郎さんが残している何本かしかなかった。私は、そのときまだ中学3年でした。ですから、中学3年のときから放送の仕事をはじめて、そのときは三木鶏郎文芸部というグループでして、学生だったのですが、会社仕立てにして、私が社長になりました。そして、専務取締役というか、おカネを預かるいちばん大事なところに野坂昭如を置いたのが失敗で、いろいろと使い込みだ

の何だのありまして、その迷惑をかけた分を帳消しにしようと、野坂のエッセイを読んでいますと、永六輔が出てくると必ず前に「天才」と書いてあります。あの「天才」とつけることであと何回で損を補うという、うまい手を使っているのですが、どちらにしても赤字でだめになって、それをもう1回立ち直らせたのが五木寛之なんです。いずれにしても、そういう世代があるとき放送にワッと入り込んできました。入り込んできたのですが、記録されているものはこのへんは何もないんです。当時は、記録して保存しておくことにひたすらおカネがかかって、手間もかかって、大変だったわけです。

『日曜娯楽版』をやっていたところに、NHKの正面玄関を入ると、右側がテレビの実験放送をやっているスタジオで、このテーブルよりもっと大きいカメラがぶつかり合っている。本当に狭いところで、照明も、この会場も暑いですが、こんなものではない。着物を着て行くと、色が変わってしまうというようなものまでありましたね。もっと前、戦前からいきました、浜松のNHKの玄関のところに走査線が28本という、しかも縦の走査線でイロハのイという字が入った受像機が置いてある。つまり、日本ではテレビを初めて浜松で実験したんですけれども、浜松高等工業学校で高柳健次郎さんがそのイの字から始めるわけですね。そのイの字を昭和天皇がそこですでにご覧になっているんですね。それが戦後まで実験、実験、実験を重ねてきた、その実験放送のいわば開局のときから、学生ではありましたが、お手伝いをしはじめて、最初は台本を書くという仕事に携わっておりました。ちょうどいま、TBSでいうと40周年、TBSだけではなく信越放送も、名古屋の中部日本放送はもう1年早いんですけれども、開局40周年というのがいまあちこちにありまして、私も名前を出してから40周年ですから、40年たってやっと放送ライブラリーができたのか、という感じがあるんです。40年たっているんですね。この40年間、もちろん各企業ですとか、あるいは放送局で、それぞれがライブラリーを持つ努力はしてきました。そういう努力はしてきましたけれども、それではもうどうにもならないというところに、本当にこの横浜が素敵なことをしてくださった。しかも、たくさんの企業、あるいは行政も含め、行政も、たまにはいいことをするんですね。いろいろとなさっていらして、ありがたいと思っているのですが……。

その保存の仕方のことをちょっと申しますと、きょうはのちほど萩元さんがコーディネーターで登場なさいますけれども、テレビマンユニオンの『遠くへ行きたい』という番組を1回目からやっていて、途中でフィルムからビデオに変わるんですね。あの番組は最初のワンクールは全部フィルムなわけです。ビデオテープというものができた、これから楽になる、カメラは大きいけれど、というのから、いまやカメラはどんどん小さくなってきていますけれども、いろいろところで放送の現場が変わっていくのを目撃してきました。そうして目撃しながら、だんだん年をとってきますと、こういうところに呼ばれて記念講演、記念講演などするにはちょっと若すぎますよ、森繁久弥さんとか、まだほかにお年寄りがいるんですから。最初から実験放送にかかわった皆さんが。だから、そういう方のほうがよろしいのと思ったのですが、しばしば横浜にはおじゃまして、ご縁もあつたりして、横浜だからということで、たぶん私になったんだろうな、と思っております。

さて、そのテレビ40年の自分史というのでしょうか、先ほどの高柳健次郎さんのイの字からいったら40年どころでないんですが、やはりテレビの自分史というものをどうしても見てみたいと思います。そうしますと、テレビが実験放送から始まって、この40年で何をしてきたかを明らかにするために、それは膨大な資料を使って、立派な番組を作らなければならないでしょう。それから、ライブラリーにお願いしたいのは、先ほどからお話しているように、穴があるんですよ、抜けちゃっているところが。何々賞受賞というようなものはみごとに残っていくんですね。ですけれども「お初孫さまが」とか、「失礼しました。お初孫さまが」とか言って、レロレロレロしている敬語などはこのことにとでもびったりしているんですが、でも、そういうものはたぶん残っていかないのじゃないか。フジテレビは『NG大賞』などといって残してますけれども。ですから、いいものは残りました、というのではなくて、本当にくだらないものだけれど、いつ役に立つかわからないというものが世のなかにはいっぱいありますから、そこまで目を広げてライブラリーを作っていただければありがたいな、と思っております。

放送のなかに身を置いてきた1人として、最近のテレビにはとでもついていけないところがありまして、そのへんのお話をちょっとさせていただこうと思います。NHKで『日曜娯楽版』をやっているころだったのですが、宮本常一さんという民俗学の先生がいらして、僕はこの人の大ファンで、僕の旅の先生でもあるんですけれども、放送の仕事が始めたときに、「きみが放送の仕事をするんだらば、その電波が届いている先に行ってものを考えろ。電波が届いている先に行き、そこにいる人たちと会え、その暮しを見てこい。それをテレビのスタジオ、ラジオのスタジオ、スタジオに戻ってきて、そこでレポートする、話をするようにしろ。スタジオでものを考えるな。必ず電波の届いている先へ行け」というのが、宮本さんの「放送の世界に入ります」といった僕に対する言葉だったんです。僕は、それをいまだに、いまだにといっちはいけないのですが、断固として守り抜いている自信があります。自信がありますから、別のいい方をしますと旅暮しなんですね。旅暮しですから、『遠くへ行きたい』みたいな番組のときは、旅先へどんどんカメラがきてくれればいいわけで、そういう作り方ができたんです。

もう一つ、ある時期から、宮本さんにいわれたことがあります。放送をやっていると手紙がきます。おしかりの手紙もありますし、ものを教えてくださる手紙もあるし、励ましてくださる場合もあります。そういうのに必ず返事を書け、というのが宮本先生だったんです。「人間お礼状が書けないような暮しは暮しじゃない、必ず書け」といわれたんです。僕は一時、テレビによく出ていたことがあります。そのころは毎日、100通返事を書きつづけました。1年間ですから、3万6,500通です。3万通は楽に越えていました。それをすると、自分の暮しが何だかわからなくなっちゃうんです。余っている時間はとにかく返事を書いているんですね。それでくたびれ果てて、見てくださって、何かおっしゃってくださる方にお礼状も書けないのなら出るのはよそう、と思ひまして、それがテレビをやめる、いちばんの理由だったんです。テレビをやめてしまいますと、そういうものが少なくなります。ラジオはずっと続けていますが、ラジオはそれほどではないんですね。1日30通も書いていけば、返事はなんとかフォローでき

正しくは
40本
です
④

るんです。もちろん、このことは威張っていつているのではないんですが、最初のうちは楽しかったですよ、1週間に2通とか3通でしたから。それがそうでなくなったときに、どこでやめるか、というのは当然ありました。でも、やめたら生き方が違っちゃうから、徹底してやろうと思って、自分の返事を書ける範囲内の仕事だけしかしないんです。いまはなんとかできるんですね。NHKもちょっと変わってまいりまして、私のような者が『ニュース解説』とか『視点論点』のような、いわば堅い番組に出ることがあります。それも間をおいて、前の回の手紙を全部整理したらまた出られます、という形で出させていただいております。こういうのは自分で都合がつくといえますか、若くないですから、ある程度わがままがきくんですね。

そういうやり方をしていますと、そうしていない人たちがだんだん目障りになってくるんです。つまり、ずうっとテレビのスタジオにいて、そしてスタジオでしかものを考えなくて、スタジオに集まってくる情報を何らかの形でまた返している、というだけの方たちがいっぱいいます。いっぱいいてもいいんです。それはいなければ仕事になりませんから。しょっちゅう電波の飛んでいる先に行っていたのではどうにもなりませんから、そういうのもいなきゃいけない。スタジオでものを考えて、スタジオでものをいう人もいなきゃいけない。それは両方いなきゃいけないんですね。

そういうわけで、先ほどからいつている受賞作品のような立派な番組も、そして全然立派でない、例えば日本語がいま乱れてますけれども、まったく立派でない番組もどうやってフォローしていくのか。つまり、これは行政がかんでいるところが、そこが本当に難しくなってくると思うんです。そんな悪ふざけの、そんな下品な、というふうになるのかどうか。あるいはコマーシャルひとつでもそうです。質のいいコマーシャルもあるでしょうけれども、どうにもならないコマーシャルもある。でも、どうにもならないのがないと、その時代を表せないという部分がありますから、できるだけライブラリーに通う皆さんは、そのへんのバランスをとりながら、立派な番組をまた見ましようじゃない見方を、われわれはふだんそうやってテレビを見ているんですから、大林雅美さんが出れば必ず聴視率が上がるんですから、そういうのは恥ずかしいと思わないで、そういうのがテレビなんですからね。もちろん、放送ライブラリーに行つて「大林雅美」というところを探すと、だだだだたつと上原謙さんから、シキボウの山内さんからずらつと出てくるようになっていくかという、そうはいかない。そうはいかないけれど、テレビというのはそれがなければいけないんです。そういうテレビに対するつかみ方というのを、ライブラリー側も、そのライブラリーには横浜を中心にして日本中からお客さまがいらっしやることですが、そうした方々も、ぜひ考えのなかに入れておいていただきたいと思つます。

それで、テレビの仕事がそういうふうになつたものですから、すみません、自分の話で、娘がアナウンサーになるといつたときに、とても反対しました。反対しましたけれども、最近の子どもは親の反対などはびくともしませんから、テレビのアナウンサーになつて、毎朝ニューヨークから「永さん」といわれると出てくる娘がおります。これも宇宙衛星で、衛星放送で。そういうのを見ていると、私、だんだんだんだん気力がなくなるんです。もう娘たちの世代

なんだな、というふうな。でも、テレビとどこかでつなげていたいな、と思つまして、3年前から文京区のケーブルネットワークにレギュラー番組を持ちました。だから、横浜は見えません。文京区しか見えません。そのときにぼくが考えたのは、見てくださる方と緻密に連絡をとつていく、必ず見てもらえるようにする、ということだったんです。放送を始めたときには、見ている方の反応は30人しかありませんでした。3年やつて70人やつてですね。このへんがケーブルテレビのアメリカの状態と日本の状態の違いでもあるわけですが、やつと最近、荒川区でもケーブルテレビが見られるようになりました。文京区と荒川区は隣り合つているところがちつとあるんです。来年、台東区がケーブルネットワークを始める。そうすると、そこで少し広がるんですが、この間までは文京区だけなんです。文京区だけだと、放送を始める前に、見てくださつて方たち全部に電話連絡をして、「では、始めますから」といつと、全部見てくださるんです。これがおかしいんです。こちらもお席をとつちゃうんです、どんどん。いつも番組の冒頭で、「文京区根津のだれさん、白山のどなたさま、三百人劇場前のおつな寿司さん、いいですね、いきますよ」といつと、その人たちに放送しているんです。これがなんとも楽しい。NHKの実験放送時代、誰が見ているともわからないでやつていた時代が、たぶん、そういう時代だったんだろうと思つますけれども、いまケーブルテレビはそういうことができるんです。僕はとつても気にいつておつまして、衛星放送で全世界へニュースを流すのが娘ならば、よし、おれはとことん文京区にこだわつてやる。文京区生まれなんです、私。そういうテレビもあるんです。確実に連絡しあつて、放送が終わると、また電話して、「どうでした?」といつと、またすぐ返事がくるんです。こちらはちゃんとお席とつてあつて、向こうからも電話がかかってくる、これは何なのだろうと思つますよね。ご町内の、村役場の放送とあんまり変わらない。変わらないんだけど、名にし負うケーブルネットワークですからね。いまは文京区のケーブルテレビとはいひません。東京ケーブルネットワークといひますが、東京の場合でいつと、東急沿線と港区と、というふうな、いまばらばらにあつて、つなげていないんです。

アメリカの場合は、これがババツとつながつて、既成の大きな局よりも力を持つてきたという歴史がありますから、たぶん日本の場合もあつたろうと思つたんでしょうね。でも、そうはいかなかつた。やつぱりおカネがかかるということがあつます。契約料がたいへん高い。高いのですけれど、契約してしまつと、いかに安いことかということがわかるくらいで、チャンネルの数も多いですし、画面もきれいになりますし、横浜でも、まだ加入していない方がいらしたら、ぜひ、おすすめていたと思つます。これは文京区だけに限りません。とてもいいんです、地域に密着している仕方が。例えば佐賀県の唐津なんかはもうすでに始めてるのですが、同じケーブルネットワークでも、テレビのほうにカメラを内臓させておきまして、これはプライバシーの問題がちつとあるのですけれど、一人暮らしのおじいさんのための、というケーブルネットワークがあつまして、ちゃんと写るところにいつてください、一人暮らしのおじいさん、といつと、こつちのほうから「おはよう、おじいちゃん、だいじょうぶですか」といつと、おじいちゃんはテレビの前で、「ああ、だいじょうぶ、元気だよ」といつている。その映像はち

んと役場のほうに戻ってきているわけですね。それで話し合いができる。ですから、おじいちゃんがどこかで倒れていたりするといけないから、ちゃんとカメラが部屋のなかをですね、ここが問題なんです。そういうのはいやだという人と、何かのときに早くお医者さまがきてほしいから、それでもいいという方といらっしゃるんですけども、そういうところもあるんです。こういうケーブルネットワークは、いま日本中に増えてます。離島ですとか、過疎の村に行けば行くほど、スタジオと見ている方が微妙につながっているわけです。東京の場合でいいますと、3年やって、ちゃんと出欠がとれているのが70人ですからね。それでも微妙に増えていきます。きょうまた1人増えた、また2人増えた、といった調子です。

こども、先ほどの手紙の返事と同じなんです。最近では、出席とるだけで5分以上かかっちゃうんです。こういうのは放送のなかでは無駄といえども無駄なのですが、それをやめろという声は一つもありませんね。でも、これがどんどんどんどん増えていくと、出席とって番組が終わっちゃうという、なんだかよくわかんない放送になっちゃうのですが……。NHK、それから民放のテレビが開局したときからかかわって、ある時期は一生懸命に台本を書いたり、ある時期からはテレビに出演もしたり、若い芸人さんたちを育てたりして、いろいろやってきましたけれども、老後のテレビとしては、いま、このケーブルネットワークぐらいおもしろいものはないのでありまして、僕はケーブルネットワークが大好きなんです。でも、スポンサーがつかえませんから、ケーブルネットワークはほぼ予算がないというのが現状なんです。区民のお知らせは区のほうからやりますけれども、そうでないところは経営がとても難しいんですね。作ったものの、うまくいってないというところも日本中にありますが、なんとかこのケーブルネットワークのなかのテレビにいてみたい。そうしながら、NHKにもときどき出ようという、とてもぜいたくな考え方なんです。

このNHKというのが、ここのライブラリーにはNHKも協力していらっしゃるの、ちょっといいにくいのですけれども、大林雅美さんで聴視率が上がるとの同じように、よくわからないことがしばしば起きて、ついこの間、私はジャンパーでニュース解説をやったんですね。それだけで、ジャンパーでニュース解説とは何事だ、ネクタイをなぜしない、どうしてきちんとしない、というのがくるんです。ネクタイをしていけばいいのかというのなら、暴力団なんか、おそろいの背広で金バッジをつけて、ネクタイをしている。そのへんがよくわからないんですね。でも、NHKというのはとても偉いんです。対応がとてもしっかりしていらっしゃる。きょうはNHKの方もおいでかと思いますが、NHKが偉いのは、抗議がきたり、質問がきたり、いろいろとあるのを、とてもていねいに対応するんです。おカネをいただいているということも、もちろんありますよ。ありますけれども、とてもていねいです。ですから、いっていることが違ふとか、まちがっているとか、それは賛成だとかいうのだけでなく、いま加賀美アナウンサーのしているスカーフはどこで買ったんだとか、そういうのでもちゃんと調べて答えるところなんです。民放はあまりこういうことはしません。民放に抗議を申し込んだ方はおわかりかと思いますが、うるせえや、見るな、この野郎、なんていったりして、どこの局とはいませんが……。それに引き替えNHKは、とことん対応するんです。その対応の仕方がま

たみごとで、これは出演している側も当然、対応しなければいけないんですね。

ついこの前、クレッソンというフランスのおばさんが、日本人は働きすぎだ、働きすぎだ、なんであんなに、といて、それが話題になったときがありました。もちろん、いまでもあの方は日本の悪口をいったり、いかなかったふりをしたり、いろいろなさってますけれども、働きすぎだ、働きすぎだ、とおっしゃっていたあの時期なんです、ニュース解説で、「働きすぎじゃないと思う。日本人は働き好きなんだ。もっとよく日本人を見てほしい。会社に行っただけで遊んでいるやつがいっぱいいる」と話したんです。まず、これがよくなかった。「学校に行っただけで遊んでいるやつもいっぱいいるけれども、みんなが考えているように、日本人が本当に働いてばかりいるという見方は絶対におかしい。それはアリといってもけっこうだ。日本人はアリといってもけっこうだけれども、アリという言葉と働くという言葉が二つ並びますと、僕は有名な寓話を思い出しました。もちろん、ご存じだと思いますけれども」という前置きをしまして、「アリは夏の暑い日盛りに一生懸命働いておりました。キリギリスは遊んでました。そして、秋から冬になってキリギリスはとてもおなかもすき、もう病み上がりみたいになってアリの家を訪ねて行きます。アリの家を訪ねると、アリは夏の無理がたたって亡くなっていて、キリギリスはアリの遺産で幸せに暮らしました」とやったんです。ここは笑ってくださるでしょう。これを笑わない方がNHKをずいぶん見てるんです。で、電話してくるんですよ。「話が違う」という電話が、「お前はまちがっている」と。放送が終わってから、ちゃんと対応しなければいけないんですね。あの話は、イソップはわかっているのだから、そういう話がありました、でも、これは皮肉で、クレッソンさんはそうなればいっているんでしょう、という、そういう話のもっていき方のなかにあるわけですから、イソップの話をしたとは、だからこちらはいってない、こういう話を思い出したといったら、これはしゃれですから、なんていうと、「ニュース解説で、しゃれなんかいうな」なんていわれたりして、そういう大変なんですよ。出ている人間は、見てらっしゃる方とどこかでつながってなければいけないでしょう。その対応するということがとっても疲れるんです。疲れちゃうと、疲れがとれるまで私もやめるんです。体調がよくなると、また出る。そういう出方しかできないんです、きちんとやろうとすると。

毎日毎日、番組をとりしきっている方がいっぱいいらっしゃいます。あの人たちがどんなにストレスをためて、本当に命を削っているとは思えないでしょうけれど、あれは削ってるんです。とても削ってるんです。削りながらやっていて、ばったり倒れたみたいな、テレビというのは、そういう職場なんです。そこのなかでお礼状も書けるようにしよう、健康にも留意して、くたびれたら休もう、というような楽なペースであのテレビの世界に入っていくのは、とっても技術がいるんです。これは海千山千でないとうまくいかない。それからもちろん、放送局側にも仲間がいないとだめなんですね。ですから、そういうやり方でもいいから、日常生活の感性といえましょうか、考え方といえましょうか、そういうものがあのテレビのなかに入っていないとだめなんですね。それは持ち込めそうな気がするんです。

仕事で、毎日毎日、旅をします。きょうは鹿児島から来たんですね。雨がひどくて、飛行機

がすごく揺れるんですね。飛行機のなかでも、どこにカメラが置いてあるんでしょうか、着陸するとき、客席で雨にけむる飛行場が見えて、そこにドスンと降りていくまでずっと写していくでしょう。ああいうのはとっておくんですかね。ライブラリーがあって、何日に着陸した分というふうに。ですから、いまはどこにでもテレビがあって、もちろん、そのテレビはいつでも何かを写していて、そのなかに突然、テレビがとらえる事実というのが出てくるわけです。

やっぱりびっくりした、といういい方をしますと、これも羽田の話になりますが、高石ともやとザ・ナターシャ・セブンというグループがありまして、そのマネジャーでプロデューサーの榊原君という友だちがおりました。なかなかいいプロデューサーで、フォークの仲間たちにしてみると、親父みたいな、いい人だったんですが、その人をホテル・ニュー・ジャパンに前の晩に送って、翌日、叩き起こされて、例の火事でニュー・ジャパンに行ったわけです。もちろん、彼は亡くなってしまったのですが、あのとき上空にいたヘリコプターがその火事を写しているわけです。その写している火事の最中だったんですね、羽田に行けという。何だかわからない。レポーターも何だかわからない。とにかく羽田に行けという羽田に行ったら、心身症のパイロットが突っ込んで入っている、そこへワープして行くわけですから、見ている映像はいきなり飛行機で……飛行機事故が起きました、羽田です、そこへ行きます、というのではないんです。いきなりそこに情報が飛び込んでくる。事件が飛び込んでくる。あのときに、テレビはこれなんだ、つまり、そこにアナウンサーがいようが、ディレクターがいようが、カメラがあって、そこに写っているものがある。それが事実であれば、まあ、事実ですよ、究極はそれなんだ、というふうに思ったんですね。きょう飛行機のなかで、しかも、いまからここにおじゃまするという前提にして、飛行機のなかのスクリーンに着陸していく羽田がピカピカピカと見えてきて、だんだん降りていく。あの事件のときは、きっとそのまんま海のなかに入っていくわけでしょう。「ああー」といっているときに、みんな自分たちがどう突っ込んでいくかを見ちゃうわけでしょう。つまり、それも放送なわけですよ、機内の放送ですから。機内といたって、あれだけ乗ってれば、私がやっているケーブルテレビよりずっと見ているんですよ。僕のほうは70人そこそこですからね。

ですから放送というものは、湾岸戦争であろうが、ブッシュさんの何だろうが、宇宙衛星で世界にワッと流れている放送と、ごく一部の、ごく限られた人たちのところだけで繰り返されている放送と、どこまでが放送ライブラリーの放送なんだろう。機内の放送は放送とは認めませんというのだろうか。でも、何か起きたら、あれはたいへん重要な映像なわけですね。文京区のケーブルテレビのものまで横浜の放送ライブラリーで、これも大事だからと、きちんと入れてもらえるのだろうか、というふうに心配になると、文京区のはだめでしょうね、と自分でも思いますよ。でも、横浜にだってケーブルテレビがあるわけですから、それはどういうふうにしていくのか。テレビ神奈川もあるわけですから、そういうのを優先して、テレビ神奈川のは全番組が入っているというふうになるのか。そのへんのところが難しいところなんですね。

ですから、僕らがテレビを始めたときは、始めたときというとおこがましいんですが、僕が初めてテレビにかかわったときは、視聴率というものもないし、見ている方はだいたい何人と

いう、ほんとにひとかたまりの、しかも街頭テレビジョンで見ている方を何人と計算して、ということってありますでしょう。わかりやすくいいますと、『夢であいましょう』が始まったときに、中島弘子さんがいて、黒柳君がいて、渥美君がいて、坂本九がいて、というあのときに、自分の家にテレビがあったのは坂本九だけですよ。ないんです、みんな。くやしいからというので、その次に買ったのが渥美清さん。渥美清さんが秋葉原へ行って、買ったんですね。当時から、秋葉原というのはテレビが安かったんです。安いといたって、もう大変ですよ。こんなでっかい観音開きがついていて、あのころは一人では持てないですからね、大騒ぎで、みんなで渥美さんの家に持っていった記憶があります。そうしたら、お母さんがびっくりして、テレビが届いたというだけで町の事件ですからね、あのころは、喫茶店か、どこどこにしかないというときに、自分の家にテレビがきたという、あの騒ぎは何だったんだろう、と当時が思い出されます。

そういう時代から、いまのように各部屋にテレビがあったり、あるいはテレビが時計の代わりになったりするところまで、この40年間は何という40年間なんだろう。江戸時代の40年間とか室町時代の40年間と比べて、放送だけではありませんけれども、よくも変わったという、この変わり方に、作っている側も、見ている側も、よくついてきてるな、と思うんですよ。ついてきてないんです、本当は。作っているほうも、見ているほうも、みんなついていってないんですよ。でも、本当は違うと思うんです。われわれが考えているテレビと、テレビが実際に歩き出して、ずうっと後ろ姿しか見えなくなってしまうような状況とをきちんと見すえていかないと。懐かしい番組を見られますよ、というライブラリーじゃなくて、未来はどうなるのかというところまで展望できるようにしてほしい。どんな新しい実験でも、どんな新しい仕事でも、これは民芸のほうでいうと柳宗悦さんのおっしゃっているように、どんな新しい仕事でも伝統を無視したら成り立たないという考え方でいけば、どんな新しいテレビの機械でも、どんな新しい番組づくりでも、それはちゃんと前からやってきているものがある、それをいまやっている人が知らないということがよくありますね。

ですから、年をとってからテレビを見てますと、なんでこんなばかなことを得意そうにしているんだろうみたいなことが、レポーターやアナウンサーのなかにもとってあります。そこでむしろ、明治をちょっと知っている、大正の記憶が鮮明で、戦争の記憶もはっきりしている、という人たちのために、高齢化社会ですから、老人ホームとかいうところでどういふふうにライブラリーを効果的に使っていくか、なおかつそれは、過去を振り向いて、懐かしさのなかでホッとしているというのではなくて、ちゃんと未来に向かって番組をどう見せていくかという、見せ方の問題もあるような気がするんです。学生時代に見たあの番組をライブラリーに行って、もう一度見てこよう、というのだけにならないように。そこにあるものから新しいものが生まれていく、そこにあるんだけど、惜しむらくはここがないところをライブラリー側が撮りに行って、あるいは証言を集めてくる、というような番組づくりにまで……まだラジオの調査で精いっぱいという時期ですから、いきなりオープンした当初にあまり注文をつけすぎても無理でしょうが、いつの日か、そうしていただきたいという思いでいっぱいです。

落成式といういい方は古いですが、この間、横浜の中華街で落成式というのに出席してまして、知事さんがこちらにいらして、こちら側に陳舜臣さんがいらしたんですね。落成式という看板を見ながら、僕が陳さんに「どうしてこういうおめでたいときに落ちるという字を使うんでしょうか」といったんです。「こけら落とし」も、落ちるという言葉を使います。「こんなおめでたいときに落成式というのは何なのですかね」といったら、陳さんが「うん、そうだね」とうなづいて、そこでは別れたんです。僕が家に帰ったら陳さんから電話が入っていて、なぜ落ちるという字なのかをきちんと、本当に克明に女房に伝えてあるんです。あれっとか、変だな、と思ったことにそういうふうに対応してくれるのはラジオのほうが早いんですけども、そのときには、うれしかったですね。つまり、「生まれ落ちる」の「落ちる」と同じで、「落ちる」とは新しくなるということで、決して上から下に落ちるという意味だけではなくて、新しく生まれ変わることを中国では落ちるっていうので、あそこは新しく生まれ変わったわけだから落成式が正しいんだよ、ということをきちんと教えてくださったんです。

何か尋ねてみたいことがあって、放送ですと、とくにラジオの場合にそうなんです、これは何なのだろう、何なのだろう、と思うことがありますね。例えばユーゴスラビアの話って何度聞いてもよくわからない。バルト3国に比べたらユーゴは難しいですね。そうでなくても、イスラム教の問題ひとつでも、あれだけ世界的な話題になっているのに、さて、よくわからないというときに、与えられる情報のなかから、わからないことをどんどんその場で解説していくっていう、もう一つのチャンネルがないかな、という気がよくあるんです。そうしませんと、どんどんどんどん情報が入って入って入って、疑問も感じられないくらいにあらゆる情報が流れ込んできて、あとになって、あれ何だ、何かあのときに疑問を感じたのに疑問も忘れてしまったということがありますよね。

いま私は、TBSラジオで『土曜ワイド』という番組を持っていて、朝8時から午後の2時までぶっ続けでやっているんですが、ここでは徹底して辞書を引く。ニュースが入ってこようが、コマーシャルのなかだろうが、インタビューのなかでも、スタジオのなかにいるみんなが、あれっと思ったら、すぐその場で辞書を引いて説明するまで先にいかない、というシステムをとってるんです。そうすると、とってもおもしろいんです。意外なことが出てくるんですね。わからないことがあると、とりあえず手近な辞書を引くんですけども、その辞書を引く係りが、スタジオには電話の係りっていうのはどこにでもいますが、僕の番組には辞書を引く係りが3人いるんです。辞書に取り囲まれていて、これを探せっていうと、パッと探すんです。それをずうっとやっていて、これはもっとテレビでやってほしいな、というのがいま出てきているんです。

ふだん、自分でわかっているつもりで使っている言葉っていろいろありますでしょう。これはね、初めは「母の日」だったんです。母って何だろう、と僕がうっかりいうと、その辞書係りが「母」を引いて、パッと持ってくるわけです。「母、両親のうち男でないほう」、えっ、なんだこれ。「母とは両親のうち男でないほう」って、こういうものの考え方あまりないんですよ。母といたら、お母さんで、かあちゃん、おふくろなんだけれども、両親のうち男で

ないほうって、いかにも辞書の文章でしょう。そこから始まって、何でも辞書を引いちゃうんですね、しゃべっていてわからないことがあると。わからないことってどういうのかといますと、例えば「石につまずいた」、石を探せというと、石というのがパッと出てくるわけです。「石、岩の小さなもの」。「ばか、こういうときは岩も探せ」、岩というのがくると、「石の大きなもの」と書いてある。ときどきそういうふうには手を抜いているのがありますけれども、とにかくそれで徹底していくんです。そうすると、あそこに花が生けてありますね、われわれは普通に花といっちゃうけれども、花って何だというと、私が引用するのは岩波書店の広辞苑です。「花、植物における有性生殖の生殖器」、「えー、生殖器か、あれは」って……。まぢがいじゃないんです。とても理論的で、合理的なものの考え方ですね。植物における有性生殖の生殖器というだけで、花というものがワッと開けて見えてくるんです。見えてくると同時に、花を見るとなんだか恥ずかしいという、よけいなものもついてきますけれども、例えばそういうものがないんですよ、放送の世界で。ときどきNHKが『ニュースの言葉』で、この言葉は何なのでしょう、というのをやっていますけれども、あれをもっと真剣に、わからないとき、変なときは「それは何？何？何？」っていうことを、われわれは放送の世界のなかでやっていかなければいけないのじゃないか、それに対応できなければいけないのじゃないか、という実験を土曜日のラジオではやらせていただいているのですが、そういうことがライブラリーでも当然出てこなきゃいけないと思います。

番組を残しておく、いい番組を残す、例えば秋山ちえ子さんの番組が9,000回、9,000回というのは大変ですよ。その9,000回も続けてきた番組の、例えば1回目と1,000回目と2,000回目と3,000回目というふうに、それでも10本あって、それが残っていれば、声がどれだけ年とっていかか、ということがたぶん見えてきますでしょう。だから、いい悪いじゃない切り口で、放送が果たしてきた、放送が皆さんを楽しませてきた、あるいは放送が皆さんにとっても貴重な情報をお伝えした、あるいは世界の珍しい事件とか、あの歴史的な転換がどういうふうに残されていったらいいのか、という切り口で、もう1回、ライブラリーに即して作り直す、ライブラリーとして伝えるものを膨大な資料から要約する、年とってからそういうことができれば楽しいだろうな、と思うんです。そうすると、その編集の切り口の問題が出てくると思いますけれども、そういうふうにはいろいろと活躍の場があるでしょうし、あるいはライブラリーが横浜市民の皆さんにどう親しまれていくかという形を作っていく、これは村おこしや町おこしと同じだと思うんですよ。あるものを見せるだけじゃなくて、こういう切り口がある、あるいはコンピュータ時代なんですから、どういう切り口であっても、これとこれとこれを見ると、こういうふうにつながる、というようになってもらいたいんです。例えば日光サル軍団を引くと、そのもっと前に周防猿回しの会があって、周防猿回しの会というのは被差別問題のなかから出てきたもの、それに火をつけて、サルをもう1回訓練した貴重なフィルムももちろんあるし、それに小沢さんがどういうふうからんでいたかというような形にしていきたいと思います。どうも最近のテレビを見ますと、雷門助六さんの場合がいい例でして、みんなで寄ってたかって、明治の咄家が亡くなりましたね、この方は名人でした、といっても、当人は見てないんですか

らね。そういうわけで、われわれがいちばん見たいものを見られないという現状にあるのですから、ぜひ、そういうこともできる形でライブラリーが充実していただければ、と思います。

もう1回「ライブラリー開設を祝して」という、プログラムのなかの言葉ですけれども、これは皆さんのお手元にあるので、あとでゆっくり読んでいただくとして、私がちょっと復習したいのは、川口さんがおっしゃっているように、「使い捨て文化の代表のように思われている一面」というのは確かで、先ほどそこで、「放送ライブラリーにはラジオはないんですか」と伺って、「まだないんですが、いずれ」といわれたときに、自分の番組が1本も残ってないことをちっとも残念だと思っていないんです。どこかにあるんですね、放送ってというのは流しっぱなし、それでいいの、といった考えが。流しっぱなしだからやられるんで、あんなもの記録されていたらとてもできないという考えが、これは謙遜していったるんですけれども、それが絶対あると思うんです。なくなっちゃうからいいんだ、なくなっちゃうからできるんだ、ということですね。なくなっちゃうんだから恥ずかしくてもやっちゃおう、という部分が絶対片っぽうにある。もう片っぽうには、それは文化遺産なんだから、その時代を映す鏡なんだから、これをちゃんととっておきましょう、というのもある。ここの接点をどうするかがいちばん大事だと思うんです。

一方で、民放連の佐々木さんがおっしゃっているように、「放送に携わった人たちが日々情熱を傾けて制作した番組」、これはあるんです。あるんですけれども、現場からいうのはおかしいんですが、日々情熱を傾けないで作った番組のほうが多いんです、はっきりいって。でも、それもテレビなんですから、それは何なのだ、と捨てちゃうのじゃなくて、そのなかから何を拾っておけばいちばんよいのか、やはり選び出さなければいけないと思うんです。全部ってのは無理なんですから、われわれだって全部見ることはできないんですから。もう本当に洪水のように、各チャンネルから夜昼かまわず番組が出てくるわけですし、これから衛星放送とか、また新しい放送システムが変わってきたり、減っていくことはこの先ありえないんですからね。何だってどんどん増えてくるんですから、その対応をいまからどうするか。いままでのを整理しようだけじゃなくて、これから放送はどう変わっていくのか、その放送にかかわっている人たちはどう生きていくのか、われわれはテレビをどう見つづけるのか、あるいはもうテレビから離れていくのか、そういった部分も含めて、これからシンポジウムのほうでお話がたくさん出てくると思います。

そして最後に、横浜にゴマをすりますけれども、横浜というのは、明治以降の情報源としては船ですね。つまり、横浜港の時代、船しか通信網がなかったときに、何であんなに早く情報が伝わっていった、また横浜に戻ってきたのか、ということでなんすね、それは、例えばバクビヤ新聞がどうしたこうしたとか、東インド会社がどうしたこうしたという明治以前の話じゃなくて、明治以降です。本当に横浜がある種の情報源になりえたのは、やっぱり海ってことにどうしてもなりますね。海で、船で、その船だって帆船なんですからね、まだエンジンがないんですから、明治17、18年は。そのときに、どうして情報がこの港から出ていった港に戻ってきたのか、そのいちばん典型的な例がオペラ『ミカド』なんです。『ミカド』を秩父でやった

ら、ゲート座があるんですから、ゲート座でやるのはちょっと無理かもしれませんが、ぜひ横浜でも、横浜の財政から予算を少し回していただいて、横浜でも『ミカド』を上演する会をぜひやっていただきたいな、と思います。そういう横浜に放送ライブラリーができたってことは、僕にしてみると、もう当然という感じでして、とりあえずは番組面で少しずつ充実していくでしょうし、やがてラジオ番組も入りますから、きょういらしているなかの、できるだけご年配の方、テレビに対するきびしい見方、意見をお持ちの方は、どんどんライブラリーにもものをいっていく。いまのところではNHK、民放連をはじめとして横浜が作った放送ライブラリーですね。でも、やっぱり「市民」が作った放送ライブラリー、「市民」とつけなくてもいいんですが、私たちが見つづけてきた番組での放送ライブラリーという形で積極的にご協力いただけますように、放送にかかわった人間の1人として、そのことをお願いして終わらせていただこうと思います。どうもありがとうございました。